

祈りの風景

諫早万灯川まつり

一 九五七年七月二十五日、諫早は未曾有の大洪水に襲われた。この日、記録的な集中豪雨により市の中心部を流れる本明川をはじめ、市内の川という川が氾濫。わずか一夜にして、六百三十名もの尊い命が失われた。

翌年の七月二十五日、本明川には犠牲者を慰霊しようと万灯を流す人々の姿があった。この「一周年追悼会」をきっかけに、毎年開催されるようになったのが「諫早万灯川まつり」だ。

現在、まつり当日には市民有志によって本明川の河原に二万三千本のろうそくに灯りがともされ、川面には静か

に万灯が流される。

まつりの日、子どもたちは浴衣を着て出店を楽しみ、花火を見上げる。しかし大人たちには、諫早の一番悲しい日に思いを馳せ、防災の誓いを新たにし、次の世代へと繋ぐとする強い意志が見えた。諫早の人々は、氾濫によって大きな被害を生んだ本明川を決して恨んではいない。むしろ彼らは母なる川として本明川を愛し、心のよりどころとしている。

多くの人たちが賑わいながらも、そのまつりには美しさの中に悲しみが感じられる。消えゆく万灯に、そっと手を合わせた。